

稲 山 会 通 信

第39号

2019年7月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

2019年稲門山の会総会・新年会報告



1月26日にOB・OG49名、学生8名の合計57名で、大隈会館にて総会・新年会が開催された。開会に先立ち、2018年に物故者となられた故井村前代表を含む7名の方々に黙禱を捧げた。

斉藤代表より役員の紹介があり、豊田OB（S47年卒）と山本OB（H17年卒）が新たに役員に加わるようになった。金子副代表が辞任され、また役員辞任後も長らくメール網を担当頂いた笠原OBからも挨拶を頂いた。代表よりOB・OGの現況は会員名簿記載者340名、物故者50名、連絡の付くOB・OG230名との報告があった。

その後、会計報告の承認を頂き講演の部に入り、今年は日本山岳会元副会長で日本大学山岳部OBの古野淳氏より「私の山旅」と題して講演を頂いた。古野氏はプロフィール通り数々の経験と深い見識を持ち、実に感銘深い講演であった。氏の生まれた筑豊の話しから始まり、石垣島のアンガマ、柳田国男、折口信夫、更に北越雪譜や雪女に至る日本人の山への思いの歴史を話された。また日大山岳部学生時代の1981年

3月の鹿島槍東尾根から黒部を横断して剣岳に至る16日間の山行、翌年3月の知床半島の16日間のスキー縦走は共にレベルの高い登山の話であった。「世界の山旅」として話されたチョモランマ北東稜初完登の写真は素晴らしいものであった。チョモランマの登頂者は世界で4,833名（2017年）、日本人は243名（2018年）であり、因みに古野氏は668番目の登頂者である。1986年のヒマルチェリ登頂の写真はチョモランマ以上に息の詰まる写真であり、時間の経つのを忘れる講演であった。



古野氏による「私の山旅」の講演

講演終了後は上田元代表による恒例の安全登山祈願。山の神によれば、祈るだけでは無く、各人それ相応の安全登山の努力をする必要があるとのことである。



上田元代表による「安全登山祈願」

宮野OBの音頭で乾杯をして新年会の懇親に入った。途中、学生8名に自己紹介と昨年の思い出の山を披露して貰った。また有志の挨拶は、加賀谷（S50年卒）、小竹（S51年卒・福井県）、調（S51年卒）、石原（S51年卒・兵庫県）各OBにお願いし近況を報告頂いた。



現役学生からは自己紹介と昨年の思い出の山を披露

最後は倉川役員の音頭で校歌を高らかに歌い、来年の再会を期してお開きとなった。



最後はエールと校歌斉唱により締め括った

総会・新年会出席者

S33 年卒 上田 OB
 S34 年卒 上田 OG
 S35 年卒 宮野 OB
 S36 年卒 清水、西山、山本、滝沢各 OB
 S37 年卒 加納、東、恩田、竹内、村田、打矢各 OB
 S38 年卒 宇野澤、松村(啓)、白倉、吉田各 OB
 S39 年卒 秤、三宅各 OB
 S40 年卒 笠原、関根、山崎、長谷川各 OB
 S41 年卒 斉藤、杉村、金子各 OB
 S42 年卒 渡辺 OB
 S43 年卒 佐久間、上原、迫田各 OB
 S45 年卒 青山 OB
 S46 年卒 新井、福田各 OB
 S47 年卒 森田、豊田各 OB
 S48 年卒 松村(幹)OB
 S49 年卒 常数、後藤各 OB
 S50 年卒 加賀谷、行方、名達各 OB
 S51 年卒 小竹、石原、倉川、調、鹿間各 OB
 H17 年卒 山本 OB
 H18 年卒 中村 OB
 H19 年卒 藤井 OB

現役学生 真藤(M1、元幹事長)、厚木(4 年、元幹事長)、利藤(4 年、前幹事長)、井上(4 年)、
 柳田(2 年、幹事長)、佐藤(2 年、副幹事長)、齋藤(2 年、会計)、伊藤(1 年)
 講 師 古野 淳 氏 (日本山岳会元副会長)

新井昭夫 (S46 年卒) 記

会員近況報告

－ 2019 年総会・新年会の「返信はがき」より －

◆清水正昭 (S33) 人生八十路に入って 5 年目をゆっくり歩いています。心は常に山に向いているのに実際の足は向いてくれません。残念だけど仕方ないですね。◆小松雅美 (S34) 7 回目の亥年を迎えて山はすっかり遠くなり、テレビで見るぐらいです。☆ゴルフは回数が減少、たまにエージシュートが出るくらい。☆少林寺流空手・古武道の稽古に週 2・3 回汗を流しています。◆市村栄一 (S34) 80 代ともなると忘れることが多い。顔なじみも少なくなります。会っても話が進みません。◆小島閑 (S35) 腰痛の再発で軽い山行のみです。◆大谷純通 (S35) 昨夏は、昭和 33 年に行われた、山の会飯豊山集中登山から 60 年になるので、弥平四郎登山口まで行ってきました。この年での単独登山は無理と諦めましたが、当時全員の下山口であった弥平四郎集落には、往時の面影が残っていました。◆宮野準治 (S35) 6 月に、私のロッククライミングを夢中にさせた滝谷を覗きに涸沢に行きたいと考えています。足・腰に不安がありますが、這ってでも行くつもりです (ダメかな?)。◆吉澤章仁郎 (S35) 視力の衰えと闘っていますが勝てません。テレビでの百名山シリーズを楽しんでいます。◆上田敦子 (S34) 読み応えのある記事満載の 38 号、有難うございました。総会・新年会当日の講演、楽しみにしています。◆武井靖子 (S35) 膝や腰の痛みで、山はおろか、余り出かけられません。もう私のことを知っている方も少なくなったとも思いますが、よろしくお伝え下さい。◆新川浩司 (S36) 残念ながら体調調整わず、総会・新年会は欠席します。◆清水保宏 (S36) 去年は山口・広島などに行きました。2019 年は九州の方に行く予定。これからも色々あるので、何とかやってゆきたいです。◆荒川秀夫 (S36) 昔は山に行ったなあと思い起こしながら、毎日ゆっくり過ごしています。皆さんはいつまでも元気に山に挑んで下さい。◆山本貴次 (S36) 相変わらずです。今年もよろしくお願いします。◆滝沢信一 (S36) 可能な限り総会・新年会に出席の予定です。◆東正躬 (S37) いまだ現役で頑張っております。◆恩田和夫 (S37) いよいよ“八十路”に入りました。どこまで続く路かわかりませんが、この路を元気に楽しく歩きたいと思います。ハイキングシューズにダブルストック、こんな姿での里山歩きも忘れないように心して……。◆金子弘吉 (S37) 残念ながら都合で総会・新年会に出席できません。盛会を祈ります。◆内藤錦樹 (S37) 稲山会通信、いつも拝読させていただいています。本格的な山登りは無理ですが、年相応に元気にしています。総会・新年会のご盛会を祈っております。◆村田進 (S37) 毎日 1 万歩を目標にウォーキングに明け暮れていますが、最近では女性やベビーカーを押している人達にも抜かれることが多くなりました……。◆卯月一好 (S37) 若い時の病気が原因なのですが、泌尿器系の一部が不調、不便をきたしています。◆青木一隆 (S38) 幹事さんご苦労様です。山歩きが困難になり、寂しさと悲しさの毎日です。北ア全山縦走は懐かしい思い出です。現役の皆さんによろしく。◆栗又功雄 (S38) 相変わらず、絵の会の雑用と制作に没頭して

います。 ◆松村啓之亮 (S38) 「稲山会通信」の現役・OBの山行記録を読んで、羨ましさを禁じえません。まだ山への諦めがつかないのかしら。皆様の登山の安全を祈っています。 ◆白倉俊夫 (S38) 今年はハイキングにも行ける様、頑張ります。

◆稗勤 (S39) もっぱら家に籠り家事全般、介護に勤しんでいます。散歩もままならないが、結構気楽でゆったりした気分を楽しんでいます。一読お勧め “帰れない山” 新潮社 パオロ・コニェッティ 関口英子訳。 ◆藤井榮二 (S39) 元気に暮らしています。総会・新年会、ご案内有難うございます。 ◆鈴木明人 (S40) 先約あり申し訳なし。小生元気。スキーを楽しんでいます。3月にはツエルマツ・スキー行の予定。

◆田野辺親遠 (S40) 残念ながら所用の為、欠席します。昨年の山行はチロル9日、国内6日の計15日でした。 ◆笠原豊 (S40) 今年は唐松岳～親不知、四国の山を歩いてみたいと思っています。BMI=22です。町内会の用事と身の回りの用事などで、スケジュールが取りにくいです。寒がりになりました。基礎代謝が減ったのでしょうか。

◆梅崎與一郎 (S40) 闘病中の為出席できません。残念。 ◆山崎征彦 (S40) 相変わらず「シルバー」の仕事を続けています。取りあえず何とか頑張っています。

◆井上昌代 (S40) 12月には北海道で初すべり、テニスも続けて元気です。代表さん、色々お世話様。井村さんが女子OGの新年会参加をいつも誘って下さっていたのに本当に心残りでなりません。「通信」の金子さんの「登山と薔薇」素晴らしい一文に心惹かれました。 ◆松村葉子 (S40) 多才な方々による「稲山会通信」いつも感激し、楽しく読んでおります。☆編集者さん、投稿してくださった方々、有難うございます。

◆斉藤雄二 (S41) 代表2年目です。現役が「より大きな山をより安全に登れる」様、支援してゆきます。本人の山に登る体力は、ほぼ枯渇しました。 ◆稲吉豊 (S41) 一句披露。「認知症の検査くぐりて老の春」。 ◆海野俊男 (S41) 体調にやや難があり山行も出来ません。山友達の頑張りを羨ましく感じながらも応援しています。

◆渡辺征二 (S42) 送られてきた稲山会通信で、2018年には5名もの訃報があり、驚いています。親しくしていた身近な人が2名もいて、その思い出をたぐる日々で、ちょっと寂しいです。残った我々が会うことで、元気をもらいたいと感じています。仲間も誘いたいと思っています。お会いできる日を楽しみに。 ◆高岡勝 (S42) 竜ヶ崎市で晴耕雨読、時々旅行・ウォーキングの生活を楽しんでいます。総会・新年会には、母の逝去、私の体力不調もあって参加できませんでしたが、今年は2年ぶりに出席させていただきます。

◆佐久間正昭 (S43) 何とかランニングは続けていますが、記録を維持するのが精一杯です。 ◆上原敏行 (S43) 左足首の激痛をとる為、柔術整体院に行き、治療に努め、本年の雲ノ平山行に向け精進しております。 ◆迫田泰敏 (S43) だんだん元気がなくなってゆきます。 ◆太郎良博 (S43) お陰様で足腰の方はまだ歩行に耐えられそうです。無理のないレベルで、山歩きを楽しんでいます。追伸：12月末に右手首及び薬指を骨折してしまい、療養中です。とても楽しみにしていたのですが、総会・新年会は残念ながら欠席させていただきます。ご盛会を祈念申し上げます。

◆丹治和男 (S44) 土日は用事が入っており、総会・新年会は失礼致します。

◆齋藤延雄 (S45) 毎朝、丹沢山塊の大山(1,251m)を見て暮らしています。体調は回

復していますが、もう少し努力が必要なようです。今回の総会・新年会は都合により欠席させていただきます。会員の皆様によりしくお伝えください。 ◆島田弘康 (S46) 去年はトムラウシ山で心に残る素晴らしい山行が出来、登山スタイルを見直す契機になりました。今年も感動を求めて、同じような山登りができたらと思います。また役員としてホームページを担当しています。皆様のご投稿を心からお待ちしています。

◆新井昭夫 (S46) 長らく役員会のお手伝いをしておりますが、会の行事に大勢の方の参加を頂き、稲門山の会が活発化する事を願っております。 ◆中村牧生 (S48) 総会・新年会の盛会をお祈りいたします。 ◆西山一夫 (S49) 近隣の山を楽しんでいます。

◆鈴木良一 (S49) 地元のクラブの山行と重なり、総会・新年会は欠席です。

◆小竹正雄 (S51) 昨年より月に一度、道元禅師が越前に入り最初に開いた道場である「吉峰寺」で高校山岳部 OB の方々と座禅を行っています。11 月末には「吉峰寺」から「永平寺」までの山歩き（道元禅師が永平寺を開山するために通られた尾根伝いの道で「祖跡コース」と呼ばれています。約 5 時間ほど）を楽しみました。 ◆石原順三 (S51) お世話になります。 ◆調昭雄 (S51) 会社を無事卒業の後、東洋鍼灸専門学校で学び、国家試験に合格し、準備を重ね東中野の実家の場所に「調鍼灸院」を開業しました。特に同世代のカラダの痛みを何とかしたいと思っています。 ◆狩野雅 (S52) 秋にハワイに出かけたり、年末は十勝岳周辺で山スキーの予定です。総会・新年会、今年は欠席とさせていただきます。総会・新年会、出席の連絡が遅れ申し訳ありません。

◆角田清隆 (S52) 特段健康上の問題なし、元気です。当日先約があり総会・新年会に出席できませんが、またお誘いください。 ◆亀田吉史 (S52) この 1 年山には全く行っていません。今のマイブームは鎌倉仏教と備前刀です。 ◆米山不器 (S54) 名古屋で仕事をしています。いつもありがとうございます。 ◆里方昭彦 (S58) 去年は山から遠ざかっていました。 ◆神谷宏 (H3) 札幌勤務となり道内の山を少しずつ登っています。 ◆中村達 (H18) 娘が 3 歳になり、仕事に子供の世話にと、てんやわんやの生活を送っています。去年は久々の雪山ということで、GW の唐松岳に登ったのですが、バテバテで衰えを感じてしまいました。なかなか日程を合わせるのが難しいですが、現役メンバーとも登ってみたいものです。

(文責：役員会)



現役山行：八ヶ岳天狗岳雪上訓練山行

柳田野衣（社会科学部 3 年）

3 月 12 日～14 日に天狗岳にて雪上訓練を行った。雪が少ない年であったが一番積雪の多いタイミングで山に入ることが出来た。天狗岳登頂こそ果たせなかったものの、雪深い樹林帯や新雪の中での訓練は貴重な経験であった。今回は事前のザイルトレーニングを行うことが出来なかったが、岩場経験のある後藤 OB の指導の下、確かな訓練を行うことが出来た。



黒百合ヒュッテ前にて

参加者

現役：柳田（2 年）、齋藤（2 年）、桂（1 年） OB：後藤（S49 年卒）

3 月 12 日（晴れ）

11 時に茅野駅に集合しタクシーで渋ノ湯に向かう。渋御殿湯前で装備の準備と確認を行い、12:40 行動開始。途中 2 回の小休止を挟み、16:55 黒百合平に到着。新雪を踏み固めるのに汗をかき無事にテントを設営した。夕食後 20:00 就寝。天気予報では 14 日の天気が良くないようなので、13 日の午前中に雪上訓練を行い、午後に天狗岳の登頂を目指すことにする。



雪上訓練風景

3 月 13 日（雪）

6 時に起床。夜中降った雪で、テントの淵も埋まりヒュッテ前の丘も真っ白。雪の中でアイゼンを装着し 8:15 雪上訓練開始。ラッセルで丘を上がり、歩行訓練、ピッケル使用、滑落停止訓練などを実施。11:30 頃ヒュッテで昼食をとる。晴れ間が見えた 12:45 頃中山峠へ向かい樹林帯を抜けたが強風のため撤退。その後、ヒュッテ前の斜面でザイルワークトレーニングを行った。天気次第ではあるが天狗岳登頂は翌日に持ち越し。



天狗岳への稜線にて

3 月 14 日（雪のち晴れ）

6 時起床。外は吹雪いており、時間の経過とともに天候は回復する見込みであったが、大事をとって下山を決意。テントを畳み 8:30 黒百合平を出発。途中から晴れ間も見え始め、快適に下山し 10:45 渋御殿湯前に到着。温泉でゆっくりと汗を流し、12 時にタクシーで茅野駅へ向かう。駅前でおいしいお蕎麦を頂き、帰路へ。

春のハイキング報告

松村幹雄 (S48 年卒)



矢倉岳山頂にて

平成最後のハイキングは足柄山地の矢倉岳で実施しました。当日、4月7日は晴れて気温も高めです。新松田駅から箱根登山バスに乗り、地蔵堂で小型バスに乗り換えて足柄万葉公園に着きました。そこで山本 OB と奥様、長女（3歳10か月）が合流して、OB・家族15名、学生7名の総勢22名の参加となりました。

自己紹介の後に笠原 OB から矢倉岳の地質等について説明があり、倉川 OB のリードで準備体操をして、金子 OB を先頭に山頂を目指して出発です。しばらくはヒノキの林の中をゆっくりと下ります。快適な道です。やがて登りが始まり、現役学生に先行してもらいます。清水平の分岐からは急登になりますが、ひと頑張りして矢倉岳山頂（870m）に着きました。気温が高いせいか期待した富士山は見えませんでした。金時山、明神岳、神山等箱根の山々を見ながら思い思いに昼食と歓談です。地元の男性がドローンを飛ばしていて我々にも画像を見せてくれます。矢倉岳の主のような人で頂上の標識も自作です。

下山は清水平で山本 OB 家族と別れ、14時30分には先頭グループが地蔵堂に到着しました。バスの時間まで間があるので学生達は夕日の滝を見に行きました。最終組も15時過ぎには到着しました。満開の桜の下で写真を撮り、バスで新松田駅前に戻って、恒例のOB・現役合同懇親会を開催して水分補給と歓談で春の1日を締めくくりました。

コースタイム

新松田駅 10:05 = 足柄万葉公園 11:00～ 矢倉岳山頂 12:30～ 地蔵堂 14:30 = 新松田駅 16:05

参加者

OB： 打矢（S37）、笠原（S40）、斉藤（S41）、金子（S41）、上原（S43）、福田（S46）、
豊田（S47）、松村（S48）、後藤（S49）、加賀谷（S50）、倉川（S51）、柴原（S52）、
山本（H17）およびご家族

現役： 柳田（3年）、佐藤（3年）、齋藤（3年）、板橋（2年）、夏目（2年）、深井（1年）、
坂田（1年）

投稿「昭和 49 年夏合宿の思い出～北アルプス縦走と劔岳 RC～」

行方正幸 (51 年卒)

昭和 49 年、大学三年生の夏、「山の会」に女性が入って来た。それも私がリーダーの北アルプスのパーティーに参加するというのだ。それは、上高地～蝶ヶ岳 (2,667m)～常念岳 (2,857m)～槍ヶ岳 (3,180m)～水晶岳 (2,986m)～黒部源流～薬師岳 (2,926m)～立山 (3,051m)～劔岳 (2,999m)～室堂と北アルプスを 2 週間あまりかけて縦走し、その後、劔岳で 1 週間ほど岩登りを楽しもうという、とても欲張った計画だった。以前から計画を練り、楽しみにしていた合宿だった。その山行に女性が参加する。先輩たちは興味本位でいろいろアドバイスしてくれるのだが、女性との山行は初めてのことなので戸惑った。夏合宿の前途多難が予想された。

7 月 31 日、合宿の初日から悪い予感通り、蝶ヶ岳の登りでまず新人がバテだし、そのうちに二年生の名達一彦が腰の痛みを訴えだした。カラ身で名達を歩かせたがとうとう歩けなくなり、蝶ヶ岳のキャンプ場につかないうちに真っ暗闇になってしまったのだ。そして、天幕も満足に張れないまま、



蝶ヶ岳の稜線から穂高連峰を望む

ヤブの中でビバーク (緊急の夜営) となった。みんなが疲れていた。特に経験の浅い新人にはビバークがショックだったのか、不安の色は隠せなかった。おまけに水もなくて満足に食事も取れない。食後のミーティングで腰の靭帯を痛めた名達は翌日に下山させることとし、残り全員は蝶ヶ岳のキャンプ場まで行き、このまま合宿を続けることを告げて、動揺しないよう注意した。

もう一つ問題は、新人の本城由理だ。天幕の外に出て、彼女に私の心配事を伝えたと、彼女は心配ないと屈託なく答えてくれた。テントに戻ると、全員がいっせいに私たちを見た。それは先ほどのような疲れた眼つきではなく、こころなしか輝いているようだった。その時気がついた。山の夜は恐ろしく静かであることを……。

翌日、私は名達を上高地まで降ろし、再び蝶ヶ岳まで登り返した。その後、我々のパーティーの気持ちはひとつになったのか、合宿は順調に進み、4 日目に槍ヶ岳の頂上を踏むことができた。そこで、体調を壊した新人の柴原至を伴い四年生の加賀谷さんが下山し、東京の就職戦線に戻っていった。さらに 2 日後、



大天井岳の稜線で休憩 (縦走 4 日目)

雲上の樂園といわれる黒部川源流の雲ノ平で、私たちは1日休養を取ることにした。

雲ノ平は高山植物のお花畑の中に池塘や残雪が点在し、水晶岳（2,989m）、鷲羽岳（2,924m）、三俣蓮華岳（2,941m）、黒部五郎岳（2,897m）と3,000m級の山々に囲まれた美しい高層湿原である。ここから30分ほど下った高天原というところには温泉が湧いており、1週間ぶりに風呂に入りに行く者、釣り竿をもって黒部源流にイwana釣りに行く者、昼寝をする者と自由に1日休むのだ。昼寝をしているとお花畑は綺麗だけれど這松の陰などに空き缶やゴミが捨ててあったので、一人で拾っていると、いつの間にかどこにも出かけずにゴロゴロしていた新人や二年生もゴミ拾いを始めて、瞬く間に雲ノ平のキャンプ場を綺麗にしてしまった。



雲ノ平の天場で寛ぐ

夕食が終わり、ひと段落すると山の歌の時間が始まった。当時の山岳会では必ず自分たちのオリジナルの歌集を作っていた。「新人哀歌」「岳人の歌」「いつかある日」など山の歌を先輩から後輩に伝えていくのが山岳会の習わしだった。その内OBが差し入れてくれたダルマ（サントリーオールド）を飲み始めると、個人の持ち歌を歌わせる。はじめ私が「赤色エレジー」、次にワングル部から来た二年生の石原順三が山の歌を、新人の鹿間行喜（三年生）が「愛しのオルタンス」を披露した。彼は学内のセクト争いに巻き込まれて教室に行けなくなり、山の会に避難してきた学生だった。そのう



雲ノ平から水晶岳を望む

ちに一年生の番になると、縦走で髭面になった三宅辰幸がチャチャを入れた。「本城～、お前～、何か歌えよ～」。本城は突然、ヒット中の山口百恵の「ひと夏の経験」を歌いだした。これには全員ぶったまげて、なんだか皆ドギマギしてしまったのだ。それまで、山の中でそんな流行歌を歌う奴なんていなかった。そのうちヤケクソで春歌を歌い、高校の校歌を歌い、静かな雲ノ平のキャンプ場でうるさい歌合戦が夜中まで続いていった。

合宿の後半は天候にも恵まれ、仲間たちもすっかり山の生活に慣れてきて、薬師岳を越え、立山連峰を越え、別山乗越までくると、黒い鋼のピラミッドのような劔岳の姿が眼の中に飛び込んでくる。とうとう来たのだ、憧れの劔岳に。縦走12日目、高校生のころから憧れてきた劔岳の山頂を踏むことができた。新人の鹿間も三宅も頑張った。黒部五郎岳の雪渓で転んで這松に突っ込むというアクシデントはあった



立山山頂から望む後立山連峰

ものの遅れることなく歩きとおした本城の根性はたいしたものだった。そして倉川秀明、石原の二年生が立派な山男に成長し、なによりも夢に描いていた憧れの山行を、仲間たちと山頂に立てたことがうれしかった。

ところで、山の合宿において食料計画はとても大事だ。家庭でもそうだろうけど。夏山合宿で2週間近く、毎日30～40キロの重荷を背負って歩くのだから、楽しみは食事くらいしかない。そして、日本の暑い夏を乗り切る失敗しない献立が必要なのである。2週間も腐らない食材などそうざらにない。「山の会」の夕食の基本は「カレー」「シチュー」「豚汁」「釜飯」の4つだ。必要な食材はジャガイモ、人参、玉ねぎ、肉類（又はコンビーフ）とカレールー（又はシチューの素）、味噌（又はだし醤油）、米。この献立を3回繰り返せば12泊分の食料計画ができる。シンプルで旨くて失敗しないで燃料も使わない。究極のメニューなのだ。ところが、食欲が旺盛だとこの計画が狂うことがある。だから食料担当の新人は大変なのだ。



縦走最後の劔岳山頂で憩う

合宿最後の夜、もう食料は米とカレー粉しか残っていなかった。カレーの具はジャガイモだけで、あとはなにもない。その日は紅茶しか飲まなかったが、そんなことでめげないのが山の男。夕方、劔沢のキャンプ場のゴミ捨て場に行き、社会人山岳会の捨てていった食料を探してこいと新人と二年生に号令をかけた。ところがないのだ。ゴミ捨て場に食料がない。次の一手は新人と二年生に「乞食」に行けと命令した。知り合いの山岳会の天幕に行き、食料を恵んでもらうのだ。

「山の会」には本城という切り札、女性会員がいる。本城に「早稲田大学岳友会」のテントに行っても何ももらってこいと言うと、30分も帰ってこなかった。岳友会では女性会員が珍しかったのか、本城はコーヒーとお菓子までごちそうになったけれど、もってきたのがマーガリンだけだったのでみんなガッカリ。食料が手に入らない。私のリーダーとしての力量が試されている。新人や二年生に食べ物をあげないと合宿から帰ったらボロクソに言われそうだ。意を決して、昨日、劔沢に着いた時におしゃべりをした小屋番のお姉さんに頼もう。俎板代わりに使っていた2週間前の週刊誌を持って劔沢小屋に行った。

小屋番のお姉さんを見つけると、明日の天気と劔岳八ツ峰周辺の岩場の状況を聞き、恐る恐る週刊誌と山小屋の食料を交換してくれないかと尋ねた。彼女は何か恵んでもらいに来たのを分っていたのだ。彼女と話してみても、ゴミ捨て場に食料がない理由が分かった。穂高の涸沢と違って劔沢のキャンプ場は大学系の山岳部が多く、我々と同じで縦走してくるので、基本的に食料が豊富ではないこと。ゴミが捨てられるのは出発する朝か午前中であり、捨てられた食料はその間に他の山岳部に持っていかれているのだ。「穂高の涸沢のゴミ捨て場にはあまるほど食料が捨ててあるけど、劔沢は少ないよな」「そんなゴミ捨て場の食料なんかをあてにしたらだめよ〜」「明日になれば、仲間がいっぱい食料を持ってくるのだけれど、今晚の飯のおかずがないんだ」「しょうがないわね。ほかの人たちに言わないでよ」。人参と玉ねぎが10個くらい入ったビニール袋をそっとくれたのである。「山小屋に2

ヶ月もいると本当に活字に飢えるのよ」。そして、破れた週刊ポストと週刊現代をもって、嬉しそうに小屋の中に入っていった。夏合宿の最後の夜、肉は入っていないけど、現地調達で腹いっぱい野菜カレーを食べることができたのである。教訓は現地調達じゃなくて食料くらいは自分で十分持っていく。しかし、大学に行った息子や娘が山のごみ捨て場で食料を漁っているというのは、親としては余り見たくない光景ですよ。

8月12日、本城を立山の室堂から見送りをして、そこで食料を荷揚げしてくる三年生の小竹正雄と一年生の狩野雅を待った。私は本城が無事縦走を終えたことに安堵した。室堂バスターミナルは観光客でいっぱいだった。待つ間にミドリ池温泉の公衆浴場に入って汗を流したり、ソフトクリームを食べたり、各自がのんびりと過ごしていた。大きなキスリングを背負って通るのはだいたい劔岳で岩登りをする山岳会だ。その内、大きなキスリングを背負った小竹たちが現れ、迎えに来たみんなで食料を分けると劔沢のキャンプ場に向けて出発した。

食料を確保すると、全員で別山の岩場で岩登りのトレーニングしながら、ハーケンなどを現地調達した。どうしてかという、上高地から2週間余り縦走をして来るため最低限度の登攀装備しか持っていないからだ。夕食の支度をしていると、少し前に「山の会」を辞めた高野啓介が現れた。穂高の涸沢で社会人山岳会の仲間と岩登りをしてから我々を追いかけて来た、そして劔岳と一緒に岩登りをしたいと言うのだ。追い返す訳にもいかないので「調子がいいなあ、まあ天幕に入れ」と天幕の中に高野の席を空けてやったのである。

次の日は天候が一時的に悪かったので天幕を長次郎谷出会の真砂沢に移した。ここは谷あいのキャンプ場で狭く、天幕も少なく、劔沢のような開放感がない。しかも幕営しているのは一般登山者は少なく大学山岳部ばかりなので、否が応でも岩登りの緊張感が高まって来た。

8月14日の朝、空はすっかり晴れ上がり、劔沢雪渓を駆け昇ってくる風は冷たい。高校生の頃、「劔岳の雪渓と岩場は良いぞ !! 凄いぞ !!」と、大学山岳部にいた兄から聞いて、ず〜っと憧れていた劔岳のクライミング。長次郎谷の広大な氷河のようスプーンカットした雪面を、行方、小竹、石原、倉川、鹿間、三宅、狩野、高野の8人は、一步一步ピッケルで汚れた雪を踏みしめ、朝日を背に受けて1時間ほど登ると、雪渓のど真ん中に「熊の岩」の台地が現れる。左側に源次郎尾根が黒く大きな影を落とし、そして右側には朝日を浴びて八ツ峰VI峰の岩壁が白く輝き我々を呼んでいる。そして正面に競りあがる雪渓の上に劔岳のサミットに連なる岩稜と真っ青な空が広がっている。なんて素晴らしいロケーションなのだ。憧れの雪と岩の殿堂のど真ん中に我々はいた。



八ツ峰VI峰Cフェースを登攀

ここから雪渓を右側にトラバースをして、シュルンド（雪渓と岩壁の間の裂け目）を越えてVI峰 A フェースに基部に到着した。高さ 150m、幅 100m とスケールは大きくはないが一番傾斜の強い一枚岩だ。我々のパーティーは 2 つに分かれ、魚津高ルートと中大ルートに取り付いた。最初の数メートルは解けた雪に付着していた小石でザラザラしているが、直ぐに節理の大きな、固い花崗岩のフェースとなってぐんぐんザイルを伸ばすことができる。これぞアルピニズムの醍醐味。快適な 3 ピッチの登攀でVI峰の頭に着いた。頂上からの鳥の嘴のような V 峰前衛峰が素晴らしい。そこからチンネの大岩壁に向かってゴジラの背のような八ツ峰上半の岩峰群が連なっていた。

ザイルを八ツ峰で解いて快適な岩稜を登ること 2 時間余りで、劔岳の山頂に切れ込む池ノ谷乗越に着く。そこから荒々しい池ノ谷の峡谷を見下ろしながら大きな岩がゴロゴロと積み重なった北方稜線を一汗かくと、小さな祠のある劔岳の山頂に飛び出した。大勢の登山者の視線が注がれるなかを 4 日ぶりに皆で劔岳の頂上を踏むと、何とも言えない誇らしさと幸福感に包まれた。（大学を卒業するまであと何回くらい劔岳で岩登りができるだろうか.....）。このような夢のような時間はもう二度と来ないだろう。



縦走後半の筆者

その後も好天に恵まれて、八ツ峰VI峰の A フェース、C フェース（2 ルート）、D フェース。チンネ北条新村ルート、チンネ左稜線と劔岳の岩登りを満喫し、3 週間にわたる山行を終了した。それは、それは、大学三年生の、学生時代の一番楽しかった夏が終わったのである。

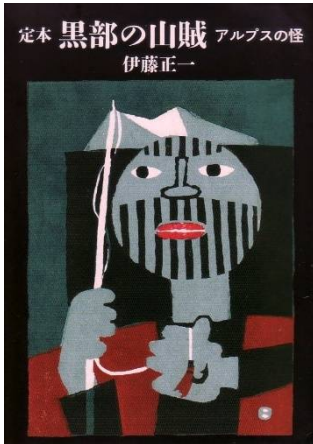
（45 年前の記憶をたどって書いたので「記録」ではなく「思い出」としました。少し、事実誤認や勘違いがあるかもしれません。ご承知おきください。）



八ツ峰VI峰ノ頭にて（左から筆者、高野）

投稿「黒部の山賊」～昭和 30 年代の山々～

稲門山の会役員会



『黒部の山賊』は昭和 39 年に発刊されましたが、その後絶版となり、平成 26 年に定本として複刊され、本年・平成 31 年 3 月 1 日に山と溪谷社から文庫版として再発行されました。昭和 30 年代後半の未開の黒部の「山賊たち」や「山の化け物たち」の逸話が語られています。題名には北アルプス奥座敷の「黒部」が付いていますが、舞台は「黒部川最上流部」と「山中の別天地・雲ノ平」です。著者の伊藤正一氏は三俣蓮華小屋（現在の三俣山荘）の主でしたが、現在は引退（ご逝去）されており、息子さんが続いでいます。また「伊藤新道」の開拓者でもあります。

さて早稲田大学山の会の山賊たちは、何故か「雲ノ平」に引き付けられ、夏合宿では数度の「雲ノ平集中」を行っています。最初は 1959 年の夏山合宿（CL 飯野城平）で「縦走形式による雲ノ平集中」が行われ、8 パーティーが「雲ノ平」に入っています。翌年 1960 年は「前半と後半の二つの時期に分けての黒部乗越集中」（CL 山口昌之）が行われ、7 パーティーが「雲ノ平」周辺を歩き、黒部乗越を経て伊藤新道を湯俣まで下っています。1961 年には「8 パーティーによる北ア全山トレース」（CL 東正躬）が行われ、全パーティーが「雲ノ平」に集中しています。この年は 6 名の女性による「女子パーティー」もあり、女子の山賊（？）が華を咲かせました。



雲ノ平の天場（1959 年）

「雲ノ平集中」は 1962 年にも行われました。この年が山の会の最盛期で、「10 パーティーによる北



精鋭の平パーティーメンバーを中心に（雲ノ平 1962 年）

アルプス縦走・雲ノ平集中」（CL 青木一隆）が 80 名の参加のもとに行われました。まさに山の会の山賊たちが、北アルプスを縦横無尽に駆け巡りました。10 パーティーは CL・劔・白馬・東沢谷・横断・鹿島槍・平・北鎌・烏帽子・燕でした。1964 年は「北ア全山縦走と涸沢 RC 定着」（CL 鈴木明人）でしたが、この年も「雲ノ平」に集中しています。1965 年にも「雲ノ平集中」（CL 斉藤雄二）が行われていますが、会員の減少もあり、以後「雲ノ平集中」は行われていません。

山の会と「雲ノ平」の上記の関係もあり、『黒部の山賊・定本』の文庫版が出た後、比較的年配の OB 間でメールのやり取りがありましたので、ご紹介しておきます。

2月20日 発信：松村 OB 受信：斉藤・金子・新井 OB

無聊のあげく本屋を覗き『黒部の山賊』（伊藤正一著・ヤマケイ文庫）を見つけました。三俣蓮華や雲ノ平を中心とした読みものの一部は、斉藤・金子両兄を含めて、往時の山の雑誌などで読んだことがあるかもしれませんが、実に面白い本です。未読でしたら是非一読あれ。新人時代にしごかれたブナ立て尾根・濁小屋の恐ろしい話・薬師を中心にした遭難・伊藤新道・雲ノ平など鮮やかに思い出しました。夏山散歩だった稜線も今は独りで雨の中を歩くことを想像すると、やはり二の足を踏む彼方になりました。

2月20日 発信：金子 OB 受信：松村・斉藤・新井 OB

私もアマゾンの電子本で出版された時読みました。アルプスの創成期の話はとても面白かったです。伊藤さんは、三俣、雲ノ平、水晶小屋、野口五郎、烏帽子小屋など、今と違って余り流行らない小屋を良く維持して来たと想います。2〜3年前、伊藤さんの後を継がれた息子さんが、伊藤新道の再開発を意図し、廃道となっている伊藤新道を下るTV番組が放映されましたが、再開発は無理そうですね。

私は伊藤新道には行っていないですが、湯俣尾根に2度、ブナ立てに2度、また高橋さん、梅崎さんとは誰も行かない五郎池で幕営したことがあります。1年の夏合宿では、磯部さん、岡崎快さん、田野辺さん、故五十嵐さんの5人で、中房温泉、東沢乗越、湯俣、水晶、雲ノ平、薬師沢、太郎兵衛平、薬師、有峰の北ア横断パーティーに参加しましたが、高瀬川に下る東沢は、当時も荒れていましたが、今では廃道になっています。当時黒部の薬師沢出合には橋が無くザイルを渡して黒部を渡り、薬師沢を沢通し遡行しました。又、折立から有峰もバスが開通していませんでした。また台風で赤牛ピストンが水晶止まりで中止になり、とても残念でした。赤牛は新井さんたちが冬に登っているのですね。この山行で薬師沢が気に入って、リーダーをやった劔から槍までの3年の夏合宿で、雲ノ平へは黒部五郎を経由せず、薬師沢を沢通し下りました。この時途中で猛烈な夕立に遭い一挙に沢が増水し、間一髪崖をよじ登り夏道へと避難し黒部の沢の増水の恐ろしさを体験しました。

卒業後、同期の杉村、小田、沼田、秋野兄と薬師沢から岩魚を釣りながら、美しい赤木沢のナメを覗き、黒部源流を遡行し、三俣の雪溪で黒部の一滴を味わいました。黒部創成期の最後の時代にかろうじて間に合い、今となっては行っておいて良かったと想います。近年夏山で雲の平から烏帽子下山を計画していましたが、高瀬ダムが出来たのに高瀬川のアプローチは大町まで出るのが困難で、ますます縁遠くなりました。



厚生部全員集合に何故か気象部の金子 OB（雲ノ平 1964）

2月21日 発信：新井 OB 受信：松村・斉藤・金子 OB

『黒部の山賊』のご紹介、有り難う御座います。ブナ立尾根は2年生の冬山で、丹治さんリーダーで赤牛を狙いました。水晶にテントを張って。この時、飯泉さんが美味しいハムを差し入れに烏帽子の小屋まで持ってきてくれました。野口五郎の高嵐尾根は私がリーダーの冬山で、新人を連れ登り、豊田君、森田君が横尾尾根から縦走してきて合流しました。裏銀座は懐かしいです。

2月26日 発信：松村 OB 受信：斉藤・金子・新井 OB

近頃はあまり（ほとんど）山の本を読まないのに『黒部の山賊』を手にとったのは、遂に小生の閑暇無聊も極まった故でしょうね。この改定された文庫版は今年3月1日に初版発行されています。

それにしても、さすが書物や知の分野に秀でた大兄らからのコメントは、「山の会」の山登りが体力技術の奥に更に豊かなもののあることを感じさせてくれます。この数年、金子先達が雲ノ平に執着している思いも充分理解できます。既にこの本を読んでいたのですね！アルペン的な剣・穂高とは違う確かに開拓期の山の趣きがありますね。

新井さんの頃に冬山で挑むことを聞いて羨望と少しの不安を感じたものですが、そこを飯泉さんが単独で烏帽子に出かけたことは、後に知り驚嘆したものです。その時のリーダーの丹治さんには、数週間前に高尾山散歩の下山ルートで、独りで登ってくるのに会い立ち話をしました。

小生の現役時代の雲ノ平は（50年誌で記録を読んだ感想では）「山の会」には少々思い入れのある場所なのかもしれません。1957年には夏合宿は千畳敷で勉強会までやっていたようですが、58年に飯豊山の大人数での集中。59年に北アルプス分散縦走となって雲ノ平が集中地になりました。小生は新人でブナ立ての登りから下山時の上高地までほとんど同じ重さの荷担ぎだった記憶があります。



松村 OB 新人の頃（雲ノ平 1959 年）

60 年が黒部乗越集中で雲ノ平を歩き回りました。集中地から在京本部に連絡をする役目を同期の関君と二人で命じられ、「厚生パン」2 枚の特配で、天場で寛ぐ連中を羨みながら歩いた三俣までの雨上がりの静かな稜線を思い出します。

61 年・62 年も雲ノ平集中でしたが折角あそこに居たならもっと広範囲に歩き回ればよかったのにと悔やまれます。しかし、あの辺りは『黒部の山賊』にも記されているように、だだっ広い地形の故か、妙なことが随分ありました。北鎌尾根から来たパーティーは、角田さんや井村さんなどがいたのですが、双六から三俣の間で考えられないようなリングワンデルグ。合宿の下見で出かけた平賀君からはカベツケ平で白骨死体が見つかったと聞きましたし、愛知大学の 13 人の遭難などを考えると、あの辺りは晴れていれば稜線散歩ですが、深奥の地らしい不思議もあります。

1 年の時か 2 年の時か忘れましたが、どこかの女子大の山岳部が夜になっても帰幕せずテントキーパーの依頼で、捜索に行くなどの小事もありました。美しい女性を助けに行く自分を想像して先輩に指名されるのを待っていたのですが、やがて無事に戻り夢は消えました。角田さんにしごかれた剣合宿の帰路、立山から針の木を超える途中の平の渡しの野天風呂がまだあったこと、など思うと「黒部の源流」辺りのことには格別の感傷があり駄文を弄してしまいました。妄言多罪

2月26日 発信：新井 OB 受信：松村・斉藤・金子 OB

メール有り難う御座います。山の大先輩から頂くこのようなメールが元気を戻してくれます。さて、松村さんのメールで地図を広げて見えています。3 年前に金子さん達と行った黒部五郎が思い出されます。伊藤新道・湯俣温泉は、話を聞くだけで行った事ありません。

本年の総会・新年会の講演者である日大の古野さんは、現役の学生時代の 3 月に鹿島の東尾根から牛首尾根を下って黒部に下りて、ガンドウ尾根から剣に登頂、そして早月尾根をおりた。流石、金子さんご存じでしたが「ガンドウ尾根」なんて知りませんでした。私は 3 年生時の春山で、鹿島の東尾

根を計画しましたが、岩峰を登れず撤退しました。

山の会の歴史で冬・春の劔岳が無かったので、我々に出来るかどうか豊田君と二人で、秋に早月尾根から登って、劔岳へ、そして奥大日まで偵察に行きましたが、結果、全く自信なくなってギブアップしたのを思い出します。でも、この偵察山行では平蔵谷を下りて源次郎尾根を登った時は、その後の奥大日まで天気も良く気持の良い山でした。雲ノ平は夏に 1 回だけで終わっています。10 年位前に山の会の仲間 3 人で太郎平小屋にテントを張って薬師沢の左股を登ったのも天気に恵まれ楽しい山行でした。

今となっては、あれもやっておけば良かった、これを何で逃したのかと反省も多々ありますが、「自分軸を持って世の中に浮遊する」と高校の先輩に最近言われました。スキーも上手く滑れず、ゴルフの腕は何年経っても上がらず、歌も詠めず、書も絵も描けず、食って寝ての人生ですが、仕方が無いと思い定めています。そんな中での松村先輩のこのようなメールは、血が回ってきそうで嬉しい限りです。有り難う御座いました。

2 月 26 日 発信：斉藤 OB 受信：松村・金子・新井 OB

懐かしいお話有難うございます。私の黒部との関りは、高校 3 年の時にブナ立尾根から槍まで縦走で始まっています。雲ノ平との関わりは、1962 年、1 年生の時の夏合宿・雲ノ平集中です。平パーティーだったのですが、新人仲間に濱田正則がいました。彼は、数十年後に理工学部の教授となり、「山の会」の会長を長期間にわたり務めてくれました。

3 年生のリーダーの時は白馬・平・槍を縦走し、雲ノ平に寄っています。4 年生の時は、夏合宿の CL となり、郷愁の「雲ノ平集中」を行いました。私自身は伊藤新道から雲ノ平に入りましたが、この時、伊藤新道で一晩過ごしました。どこかは思い出せないのですが、ツェルトから見た星空が綺麗だったことだけは覚えています。集中の後は涸沢に入り、山の会 2 度目の RC 定着に参加しました。

1 年生の時の夏合宿では、三俣蓮華から双六に移動し、テントを張った後、笠ヶ岳にピストンに出かけたのですが、7 時に出発し 15 時には戻るという驚異的(?)な記録を残しました。今では夢のような若き日の思い出です。

以上が『黒部の山賊』に関わるメールのやり取りです。先輩・後輩の皆様が自分の若き日の夏合宿を思い起こしてくだされば、編集子としては嬉しいことです。尚、松村 OB は松村啓之亮 (S38 年卒)、斉藤 OB は斉藤雄二 (S41 年卒)、金子 OB は金子治雄 (S41 年卒)、新井 OB は新井昭夫 (S46 年卒) です。



積雪期の雲ノ平・笠ヶ岳



現在の雲ノ平 (2018 年)

秋のハイキング（高水三山）のご案内

今回は奥多摩の代表的なハイキングコース、高水三山を計画しました。高水山、岩茸石山、惣岳山の3つのピークを巡る、適度なアップダウンと変化のある人気コースです。最高峰、標高793mの岩茸石山の山頂からは奥多摩、奥武蔵の山並や新宿新都心も見ることが出来ます。OB・現役合同で秋の一日、奥多摩の山を歩きましょう。皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さい。

日 時：2019年10月6日（日） 10:00 集合

集合場所：JR 青梅線 軍畑駅改札口

行 程：軍畑駅～高源寺～高水山～岩茸石山～惣岳山～御嶽駅
(コースタイム 4時間10分)

幹 事：新井昭夫（S46年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306
松村幹雄（S48年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

参加ご希望の方は9月29日迄に上記幹事宛にご連絡下さい

訃報

平成30年11月19日に山本道明さん(S37卒)がご逝去されました。

平成30年11月27日に山下幸秀さん(S37卒)がご逝去されました。

平成31年1月10日に三木常靖さん(S37卒)がご逝去されました。

平成31年3月9日に関根聰一郎さん(S40卒)がご逝去されました。

故人を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2018年度会計報告（2018年1月1日～12月31日）

稲門山の会

単位：円

項 目	収 入	支 出	残 高	備考欄
前年度からの繰越金（預金・現金計）			3,324,181	
年会費（振込分）	289,000			4,000円 x 72.25名
年会費（新年会時入金分）	152,000			4,000円 x 38名
新年会会費	270,000			6,000円 x 45名
預金受取利息	217			郵便定期預金利息
収入合計	711,217		4,035,398	残高は繰越金を含む
新年会費用		466,020		大隈会館支払
講師謝礼（南極氷託送費を含む）		53,891		講師：山岸氏
2019年度新年会準備費用		6,842		講師打合せ等
稲山会通信作成費用		53,930		37号、38号
遭難対策費用		156,807		高野OB遭難対策費（交通費等）
HPサーバー管理費用		42,960		ホームページビルダーサービス
新人勧誘費用		2,890		新歓チラシ作成費用等
登山教室教材費		3,420		
雪上訓練費用		12,090		ジャンボタクシー代
学生との打合せ費用		41,100		
生花代		27,000		井村OB（S40年卒）献花
資料作成費用		2,110		プリンターインク（トナー）代
事務局費用		23,040		役員会会議室代
銀行振込手数料		3,024		
支出合計		895,124		
収支合計	711,217	895,124	3,140,274	単年度収支 ▲183,907
項目別預金残高内訳書				
一般会計：ゆうちょ銀行口座			180,984	通帳残高額を確認済
年会費入金振替郵便口座			594,534	通帳残高額を確認済
みずほ銀行口座			506,343	通帳残高額を確認済
特別会計：遭難対策費（ゆうちょ銀行定期預金）			843,000	通帳残高額を確認済
遭難対策費（みずほ銀行定期預金）			1,015,413	通帳残高額を確認済
預金合計			3,140,274	

上記の会計報告を致します

会計幹事 新井昭夫

（尚、別途会計監事が銀行通帳残高書と照合済です）

編集後記

本年 5 月 1 日、平成から令和に変わりました。新天皇の奉祝の儀式が地元の氷川神社であり、自治会の役員として参列してきました。新天皇の一連の儀式で、雅子妃殿下の笑顔がとても良かったので、この笑顔がずっと続いてほしいと願っています。

本日は 5 月 5 日、山の便りも伝わってきますが、喜寿を迎える私には残雪の山々は、はるか遠くに去ってしまいました。5 月連休時は、移動性高気圧が訪れるので、一週間も山に入っていれば、必ず好天に恵まれます。私は現役時代そして 60 歳の定年後、劔沢や涸沢に入り、雪と陽光を満喫しました。幸せな山登りでした。

さて現役の活動ですが、新歓で 6 名新人が入会し、全体で 22 名となりました。人数はまだ流動的ですが、しっかりした三役のもと、充実した山行をして欲しいものです。5 月連休時には旧人が槍ヶ岳に登り、夏合宿は飯豊山を含め、4 つの山行が検討されています。

通信 39 号には、行方正幸 OB (S50 年卒) の投稿「昭和 49 年の夏合宿の思い出」が載っています。若さ溢れる夏合宿の興奮がひしひしと伝わってきます。行方 OB の時代は、私より 10 歳も若いのに、女性に対してはナイーブで、突然入会してきた女性にどう対処すべきか、本気で悩んでいます。この女性は無事夏合宿を終えています。山行後、青稲会に移るようアドバイスしたそうです。何か惜しいことをしたと思うのは私だけですかね。

もう一つは、「黒部の山賊」が文庫版として再発行されたのを機に、稲門山の会の役員と役員 OB で、雲ノ平を中心にメールで語り合ったのを纏めたものです。私より年配の OB の皆様には懐かしい記事かと思いますが、私より若い OB の皆様にはあまり興味は湧かないかもしれません。

最後に鬼籍に入られた方々ですが、38 号発行後、4 名の OB が亡くなられています。昨年末に山下幸秀 (S37 年卒) さんと山本道明 (S37 年卒) さんが亡くなられ、今年に入り三木常靖 (S37 年卒) さんと関根聡一郎 (S40 年卒) さんが亡くなりました。総会・新年会の返信はがきで、三木 OB が亡くなれたこと、奥様より連絡がありました。「先日、三木常靖は逝去いたしました。2019 年 1 月 10 日 享年 80 歳。生前は大変お世話になりました。比登美」。関根 OB からは返信はがきで「今年は総会・新年会出席します。元気です。」と近況報告がありました。関根 OB は総会・新年会後の 3 月 10 日に突然亡くなりました。残念です。稲門山の会の役員として、面倒な会計の仕事を長期間担当していただきました。4 名の皆様のご冥福をお祈りする次第です。 合掌

斉藤雄二 (S41 年卒) 記



5 月の前穂高岳北尾根



5 月の劔岳八ツ峰